

---

# 尊のたんてーさんっ！

コーンマン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

噂のたんてーさんつ！

### 【著者名】

Z7606A

### 【作者名】 ローンマン

### 【あらすじ】

～それはとある街にヒツソリとたたずむ、とある探偵事務所の物語…。まあ見てって下さこな～

## 第1話・『とある街のとある探偵事務所より愛を込めて』

とある街にひっそりと存在するとある探偵事務所

いつも、ここにちは。今日も良い天気ですね。

…え？お前は誰かつて？…ああ、失礼しました。ボクの名前は『  
トオル』この探偵事務所のお手伝いをさせてもらっています。

そして今は日課のお掃除中なんんですけど…んーっ！日差しが気持ち  
よくってちょっと休憩してます ほんわか

すとーーーん！

…あれ？今日の前を何かが亜音速で通り抜けたような気が……ほ  
らね。やつぱり壁にナイフが突き刺さってる

「…ううわあああっ！」

びっくりした！やや小便チビったもん

「ななな何するんですかシンさんっ！…！」

ナイフが飛んで来た方には案の定『あの人』が黒いフカフカチエア  
ーに腰掛けている

「ああ？掃除サボつてゐる懶かな助手に愛の鞭をくれてやつたのよ

あと数コマずれてたらともグロい映像が流れましたよ？

「誰もサボつてなんかいませんよっ！」

「ハイ嘘～！この俺がしつかりと見てましたあ～。『ほんわか』  
じゃねえよ殺すぞハゲ」

H口本顔に乗せて爆睡してると思つたらしつかり起きてたのね

あ。紹介します。この全身黒スーツ黒ハット赤ネクタイのいかにも  
怪しいヒトが『シン』さんです。この名も無い探偵事務所の所長に  
して唯一の探偵さんです。

「文句があるならシンさんも掃除して下やこよ～。毎日毎日ビリ過ぎ  
『せきまこと』んなに汚せるんですかー！？」

ボクの隣には牛乳パックやらH口本やらお菓子の空箱やらH口本やら  
なまけ出やらH口本やらが…まさに『山』のように積まれていて

「ぬおおおおおシ～…俺のH口本～シ～」

あ、『山』に突っ込んだよ。そしてH口本をもの凄い速度で回収  
してゐよ。残像が見えるよ。

「貴様俺のH口本を『山』のようご扱うとはこゝに度胸じやねーか

H口本の回収を完了したシンさんは鬼の形相だ。

「そんなに大事なモノならそちら辺に読み散らかさないで下せ!」

「んだとクソハゲがー!死ぬかー?いつぺんあの世でスーパーサイヤ人3目指すかクルアツ!」

エロ本を『』同然に扱われた事にかなりの『立腹のよう

だつてホラ、またナイフ持ち出してるもん

ちなみに私立探偵シンの趣味は『エロ本集め』と『ナイフのコレクション』だ

「わわわわッ!スミマセンでした!ボクが悪う『』しましたっ!…だからナイフをしまって下せ!…!

シンさんのナイフの腕は超一流です。どんな場所にでもサックリ刺す技術は素晴らしいとしか言えません。

「うつし。そんじゃあコンビニで『もひもひランティナー』買つてきなはれ

急にキャラ変わったよ!なに?京都?舞子はん?

「『もひもひランティナー』って…エロ本じゃないですか…。ボクの歳じや売つてくれませんよ」

ちなみにボクの年齢は15歳。学校に通いながらこの探偵事務所で働いている偉いコなんです。

シンさんは年齢不詳。見た目は20代前半なんだけど…

「あ？根性で売つてもらえよハゲ。土下座してでも売つてもらえハゲ。店員殺してでも売つてもらえハゲ」

「店員殺したら誰に売つてもうつんですか！」

ちなみにボクはハゲていません。フツサフサです。

「黙つて行けやあ！このカメムシ。」

カメムシ！？トロッコ上に臭い。最低！

□□□

事務所の扉を叩く音（約1ヶ月ぶり）

「…あ、はあい。今開けまーす」

扉を開けると、そこにまづつ向き加減な女の子が立っていた。

「…よひひわ。『ある探偵事務所』へ」

シンさんが椅子に腰掛けながら少女に歓迎の意を送る

・・・・・

「…………つてこの事務所名前』とある探偵事務所『だつたの――  
――――つ――?』

助手歴1年にして事務所の名前を知ったボクでした。

第1話・『とある街のとある探偵事務所より愛を込めて』（後書き）

第1話、読んで下せりありがとうございました m(—)m  
がんばりマッスル！古

## 第2話・『もひもひハンドバー』は完全版と通常版があるんですよ

ビー も監さん」にちわ。トオルです。

さて、前回名前が発覚した『ある探偵事務所』ですが…一ヶ月ぶり位に訪れた依頼主は、なんとわずか8歳の少女でした。

今はシンさんが泣きじゃくる少女から話を聞いてくるヒカル。

「…つまり、行方不明になつたネコたんを探して欲しい…ってことアルね？」

うわーマンガみたいな中国人がいるよ

「…ヒック…ぐすり…」

少女は溢れでる涙と鼻水でグシャグシャになりつつも、シンさんの質問に頷いてます。

「…よっぽど大切なネコなんだな…」

前回シンのダイブにより崩壊したゴリの山を片づけながらも、少女の涙に心奪われかけるボク

あ、シンさんも心打たれたのか、少女の頭をポンポンしてる…さすがに子供には優しいんだね

「おいガキ。テメエ金は払えるんだろーな?」

アンタいたいけな少女になんぢゅー事吐いてやがるんですか!

「…シンセん！」」」はタダで引き受けるのがセオリーでしょう！」

こんな小さな子供に、シンさんが請求する破格の依頼料なんて払えるワケない！

てか8歳の少女が探偵事務所に来んのも無理矢理すぎだろ

「ホラよ、好きなだけ受け取れや」

え――――ツ！なんだあの口！今札束バラまいたよ！しゃべり方が『世の中力ネさえあればなんでも出来る』ていう思考のイヤな金持ちみたいになつてるーつ！

「ウシヤシヤ。すまねえなアーキ

拾つてるよバカ探偵！なんだウシヤシヤって

「じゅ、アタシお家帰るネ」「

そう言い残し、少女は帰つて行つた

「ひっ。搜索開始だトオル」

珍しくヤル気満々だ。そりゃああんだけ札束貰えばやる気も出るわ…

「…そのまえ」

?

なんだろ？準備は一通り終わつたし…

「途中で『もひもひランツブー』買ひつけ  
「 もひもひランツブー」買ひつけ？」

ラムちゃんのつもつか。とか…つのだ ひろのつもつか。

「それで？ 捜すネコひどいな感じなんですか？」

事務所の階段を降りながら、今回の依頼について聞いておく

「あ？…えーと…………… 雑種？」

・・・・

殺していいですか。

「まさか1時間も話してて…ネコの特徴とか聞かなかつたんですか  
つ？」

「わむ！」

「うむ。じゃねーよボケ。この無能探偵が！」

「…はああ…」

ボクはトボトボと歩き出した。なんか途中のコンビニでアホな探偵が  
「なんで『もひもひランツブー完全版』売り切らしどんじやこのク

ソナイーブがあああつ！

とかバイトの高校生に泣き叫んでいた事とか、慌てて止めようとした店長の髪が全て引きちぎられ、本物の髪の毛が瞬時にカツラと化した事などは見ませんでした。

### 第3話・『新刊・もひもひ「ハジケル」と猫』

「むふふ…」

「コンビニを崩壊させたシンちゃんは、別の「コンビニ」で購入した『もひもひランゲブー完全版』を熟読している（歩きながら）

「…あつたぐ、シンちゃん…」これからどうする気ですか？」

…ダメだ。完全にエロ本に入ってる  
だけどホントビハショ…肝心のネコの特徴が分からないんじゃ…

「…あれ？ 騒は…」

そこには依頼人の少女が立っていた

「…あのお…」

よほど人見知りが激しいのか、少女は恐る恐る話かけてきた

「ちよづよかつたー! メンねー。ネコちゃんの特徴とか聞いてなかつたみたいで…」

「あ…はいっ…」

“ひやがりの「もひ」の事で来たみたいだ

「…で、 ネコの特徴は?」

「寝冷え…」

……まい?

「うわー!」

なんだ? いきなり何かがボクの頭を踏んでいきやがった!

「… || やア~おふん」

……ネコ? いや語尾おかしくね?

「寝冷え!」

だからこの口から何叫つてんの?

「|| やア~おふん」

無理しておふんて付けんなバカネコ  
あー、逃げちゃつたよ変なネコ

「うーひー寝冷え… どうして逃げるの…?」

…もうか…今の『』が捜してた『』なのか！

もしかして『寝冷え』って…名前？

「『寝冷え』は自由になりたいの？」

変態探偵が泣きじゃくる少女の肩をポンポンしている。ああ、『もひ  
もひランデブー完全版』読み終わったのね

「うう…寝冷え…」

……まだ8歳の子供だもん。大事なペットがいなくなれば、そりや  
悲しいよ……この『』の為にも寝冷えを捜さなきや！

「世の中諦めが肝心やで？お嬢ちゃん」

黙れ関西人くずれ

「ちょっとシンさんつーのもう仕事して下さこよー」

「誰もが貴様の思い通りになると思つたら大間違いだぞハゲがッ！」

ダメだこの人。完全にやる気失つてるよ。だつて目線が書店に並んで『もひもひランジェルイー』に釘付けだもん。  
なんだランジェルイーって

「ランジェルイー」

口に出しちゃったよ！

「お願い……寝冷えを捕まえて下さい……」

ホラ～、この辺をもうじやん

「…金ならこゝりでも払つてやるからよお」

出た―――ッ！『世の中カネさえあればなんでも出来る』つてい  
う思考のイヤな金持ちキャラ！

「御意」

失せろクソエロス。また札束拾つてんじやねーよ。

「よし！行こうかトオル君！いたいけな少女のために！！」

札束を内ポケットに詰め込みながら吐くセリフじゃねーよ

「お兄ちゃんたち… お願ひします」

ペコっとお辞儀をして去っていく少女  
かわいいなあ

「むー、トオルつ！ いたぞ…『ネロジヤ』のよつた単純な眼にいたや  
すく引っ掛かる下等生物』が

普通にネコって言えよ。てかネコジャラシって言つた時点で既にネコって言葉發してんじゃねーか

「――ヤアア おふん」

だからその詰尾はなんだ！

「貴様あー誰に向かって『おふん』などと皿の上品な言葉を吐いてやがるッ！」

なんか通じてゐる

「うふ……シソウヒツー！」

あーあ、ネコに本氣になつちやつたよ。ナイフ投げすきでしてかあのネコスゲー！全部かわしたよー！

「ふつ殺してやるあああああッ！」

「わ…ネコにとびかかつちやつたよ変態探偵

「またねよー！」

…？

「…え…」

誰の壇だろ？

「話を聞いてくれぬか？」

寝冷え葉つた――――――――――――

「なんだ?」

普通に対応してゐるシンセさんがスゲH――

「ひむ……拙者、名を『寝冷え』と申す者。今までサクラ殿のもとで幸せに暮らしておつた……」

サクラ……あの口の事が

「しかし、拙者は追われる身、サクラ殿に拾われ3時間……これ以上迷惑をかけることは出来ぬ」

3時間とか卑ひ……たこして思ひ出ねーじやん

「あ、待つてよー相が誰に追われるかは知らないけど……一齧悲じむのはサクラひやんだよー?」

「……それでも……拙者は……おふん」

もつ語麗こなシシ「みませさよ

「……やうか……わかった。あの口はまだかれておへ

…シンちゃん。

「これで…いいのかな…あの口の『気持ちを奪える』と胸が痛むな…

「……かたじけニヤイぽむ」

急にネコっぽくなつた上に語尾が異様な変化をみせた事はこの際気にしてしません

「……寝冷え…」

寝冷えは哀愁と猫臭を巻き散らしあげて行きました

「お兄ちやん…」

あ…サクヲちやんだ

「寝冷えは…寝冷えまだじつしたの…?」

「それが…」

「俺が話やつ」

シンちゃん…こんなツラ役田を自分から…

「寝冷えはな……」

……

「雨宮さんがキトクな上によそで作った愛人との不倫が本妻にバレてしまつたので行きますよふん…だそうだ」

・・・・・

は?  
?

「雨宮さんて誰!…? てか寝冷え修羅場確定じゃねえか!…!

「やつかー。雨宮さんが絡んでるなら仕方ないかー」

雨宮さん向者よ

「やーゆーひつた

「シンセ…違…もじり

シンセさんが口を塞ぐ

「もがもが

「いんだよこれで

……わうか…サクライちゃんを悲しませないためにあんな嘘を…

あの嘘で納得したサクラちゃんの脳味噌が心配です

その後、実は町一番の大富豪の一人娘だったサクラちゃんに、たんまり報酬を貰つたシンさんは早速『もひもひランジョルイ』を買  
いに書店に出かけた（小走りで）

ちなみに、たんまり貰つた報酬はボクの手には全くわたつてきませ  
んでした。

## 第4話・『探偵さんのが学校で学ぶべきは道徳心じiskaならない』

「あひー」

「やうですねえ」

どーも監さん。いやー夏です。酷暑です。

クーラーなんついてない』とある探偵事務所『では扇風機3台が総動員で風を送ってくれています。

シンさん』。

「あー、あひー」

扇風機3台を独占してもまだ暑いか

「あ、もひーんな時間…それじゃ、ボク行きますね

「おひー」

扇風機に向かつて『あああああ』とかやつてるシンさんを事務所にひとり残し、ボクは外に出た

今日は学校。

朝、7時頃に一度事務所の掃除をしてから登校するのがボクの日課です。朝・夕とお掃除をしないと事務所は一日でゴミ屋敷へと姿を変えてしまいますから…。

まったく…どうしてあの人は一晩であそこまで散らかせるのか不思

議でなりません。

「トオルーおはよー」

「あ、おはよー」

数人の友人たちと軽くあいさつを交す。彼らはボクが探偵事務所の助手（家政婦？）をしている事を知りません。

なぜなら『とある探偵事務所』及び『探偵シン』は、この街の七不思議のひとつになる程違う意味で有名ですから…

ある者は真夜中に『べつこうあめ～』とか絶叫しながらチャリンゴで川にダイブしたシンさんを見たと言い、またある者はあの探偵事務所からは時折ナイフが飛んでくるなんて話を…………ナイフは事実です。はい。

そんなこんなで、この街の人間は、あまり『とある探偵事務所』に近付こうとしません。

## キーンコーンカーンコーン

「んあ？」

しまった！午前の授業全部寝ちゃったみたい……もう昼休み。

ボクは友人数人と机を合わせ、手作りの弁当を開く。そして何気なしに外に目をやってみる。

ああ、今日も快晴……グラウンドではどつかの野良犬が蝶々を追いかけて回してゐるし……飛んでる蝶をナイフが撃ち落とすし……落ちた蝶を犬が食……

ナイフ？

「ぐわつはつはつはーざまーみろクソバタフライ！！」

なにやつてんだ変態ー！こーを何処と心得るー？貴様とは対極に位置する学び屋ぞ！

「おーグラウンド見てみろよーなんか居るぞ？」

げ…氣付かれた。

シンさんは次の標的を野良犬に決めたようで、野良犬を本気で追い掛け回している

「ぐるああああツー待ちやがれクソパグチーズ！！」

多分パグとマルチーズを気分で合わせちゃったんだろうな。てか明らかに野良犬ブルドックじゃん！

「恐ええツー！」

クラスの誰かが言つた。うん、そりやあ恐いよ。無害な野良犬相手に本気でナイフ投げてんだよ？常人のする事じやないさ。さすが七不思議。

「…あ。」

生徒の誰かが教えたのか、数人の教師がシンさんの所へ向かつた

嫌な予感が…

「ああ―――――っ！」

ハイ的中！

事もあるひにシンさんは標的を体育教師に切り換えやがりました。  
おーおー逃げとる逃げとる。必死だな体育教師。半べソじやん。

「俺さまでの暇潰しを妨害しやがつてえええ！クソーップレスがあ  
ああつ――！」

その声を敷地中に轟かせながら体育教師にナイフを投げまくるバ  
ーサーカー。

多分体育教師のタンクトップから乳首がポツコロ出でたんだね。

「……え？ひょっと…」

グラウンドから校舎に体育教師が逃げてくる

「キャアアアアッ！」

「うわああッ！」

などといった悲鳴が学校中に響く。そりゃそうぞ、体育教師が避け  
たナイフが教室に飛んでくるんだもん

どうやら体育教師を見失つたらしく、シンさんは廊下でキヨロキヨ  
ロじてる

……あ。

「……ヤバ……」

シンちゃんとバッヂリ目が合ってしまった。  
もしにこじで『おーとオル』とか声かけられたら明日から晴れてボク  
も七不思議の仲間入りだあああー！

「……」

あれ？

シンさんはなにも言わわずクルリと背を向け教室から離れて行く…

まさかボクの立場を考えて……？シンさん。ゴメンよシンさん  
！ボクは自分の立場ばかり考えて…シンさんの気持ちなんて少し  
も考えてなかつた…

「よおトオル。今朝ぶりー」

ありがとうシンさん。わざわざ放送室を占拠して全校舎に語りかけ  
てくれて

ぶつ殺すぞ。

その日からボクは晴れて七不思議の仲間入りを果たしました。

## 第5話・『悔しい時は遠慮せずに言へばスッキリするかもね』

「ジー も監さん トオルです。いやー暑い！たいへんな猛暑です。今日は休日です。休日は大体シンさんの所で家事をこなしつつのんびりするのが日課です。

そーゆーワケで事務所の階段を登つてます。

我らが『ある探偵事務所』は3階建てビルの最上階に位置し、事務所へ行くにはこの暗くて狭い階段を上がるしかないのです。

「シンちゃん。おはよー！」  
「あー、

事務所のドアを開け、こいやかに挨拶。やつぱり一日のスタートは心地好い挨拶でしょ！

「オイーツス」

「おーーっす」

ホラ、シンさんだって一応返してくれました。

…2人？

「あ、アキホ！なんでココにいるんだよ？！」

シンちゃんと一緒にソファードラッグロッカーのはボクの妹『アキホ』です。

「だつてえ～暇なんだもあん！」

「てゆーか家族にもココの『』と言つてないんだよ？」

「そんな事よりなんでココ知つてるんだよつー...」

「おー、俺がお前ん家から連れてきた」

死ね誘拐犯！

「シンちゃん。ビーやうつむりですか？」

多分『暇潰し』とか書つんだろーな

「暇。潰し」

ホラね…………『暇。』つてなんだーーーッ！

「とにかく帰るわー。父さんも母さんも心配してたからや」

「心配？なんでー？」

当たり前だろ。娘がこんな全身真っ黒の探偵に連れ去られたら誰だつて心配するわ

「あー。ちやんと親には断つてきたから安心しなチャイナ

親とも接触したのか3流親父ギャグ！

「キヤハハ！『娘をよろしくお願ひします』だつてー

ウチの親バカまるだしじゃん！

「…はあ」

このアキホというヤツは、兄が言つのもなんだが頭のネジ数本抜け  
てます。では皆さん。『とある探偵事務所』アキホがいる風景』  
をじこ覧下さー。

「おいガキ。トランプじよ「うせ」

仕事しろよ探偵

「いいよー。じゃあ私が鬼ね！」

ハイ会話崩壊！

「鬼だけは譲れねえな

うわー話続いたよ。  
てかジャンケン始めたよ。

「じゃーんけーん

「ポストハーべスト！」

ポストハーべスト？

あ、なんかアキホが勝つたみたい。シンさんが『中古テレビ』でア  
キホが『いかしたファンキー』を出したからアキホの勝ちなんだっ

てや。

「ちくしょおおおッ！」

泣くほど悔しいか変態

「じゅあくよー」

てかこの狭い事務所で鬼じつにするのか

「革命つ」

大富豪始まつてゐー！しかも第1手から革命かよ！

「あ、UNO！」

どんなルールだ！

「ぐふふ…俺の勝ちだああああ！」

シンさんが何やら手札をテーブルに叩き付けた

…あー。『フルハウス』ね。うん、最終的にポーカーに落ち着いてよかつたよ。

「甘いぜあんちゃん」

とか言いながらアキホが見せた手札はワンペア…。弱つ！

「テメヒ ふざけんな！俺の勝ちだろーが

おーおーキレヒルキレヒル

「おやおや、先程ワタクシが革命を行つた事を忘れたのですか?」

大人か子供かハツキリしる。てか革命の効果続いてたのね。

「ちくしょおおおおおおおつー!」

だから泣くな変態

「…」

?

急にアキホが黙つた…

「アウトソーシングっー!」

はい?…ああ、座つたまま寝てるよこの口。しかもつぶらな瞳全開だよ。寝言意味分かんないよ。

ボクはひとり泣き叫ぶシンちゃんを事務所に残し、両全開の妹をおぶつて帰りました。

「ムーアの法則っ!」

どんな夢だよ開眼少女。

第6話・『つまみ食いは世の中の真理だ』と母さんが…』

「ねーねー。シンちゃんて何才なのー？」

「我輩は10万46歳である」

デーモン小暮閣下おはようござニまわ

「おおお、うー！ 10万？ す、うおいー。」

信じるな妹よ

ボクは今日も事務所の家事全般に追われています。

所に遊びに来てます。

奴のアキホは9歳 小学生です 学校が終わると真っ直ぐシンさんに遊びにきます。シンさんにタメ口をきける妹をボクは尊敬します。

最終的には火炎瓶一氣のみしてやがんの！うひやひや

なんの話だ！

「さいいーだねその渡り鳥つ！」

アンタ渡り鳥にならせてんの！

2人はテーブルをバシバシ叩いて爆笑してます。

「やつりヤマザキは春のパン祭りだよねー」

他になに祭りがあるんだ！

「ハラキ ハラキ ハラキ ハラキ ハラキ... ハラキ」

一瞬で寝に入つたよ！ある意味才能だよ変態

「…あいつたまへ。」

つまらなそう」シンちゃんのホッペをシンシンしてゐ

二二

二二

二三

だつたら掃除手伝え

わかつたつて

「退屈でござる」

もつて  
誰?

「わあ～  
ネ」「ちぢめさんだあー！」

「…ホントだつてこつと聞いかソフターにネコが座つてゐる。

「あれ？」

「のネコだ…」

「ネコちゃん。お名前は？」

「名乗る程の者ではないから」

『寝冷え』だ――――――――

「うふ…寝冷え！なにして戻つてきたのをへ」

「おお。あの時の少年…掃除！」

寝冷えはアキホのビザの上でくつこんでる

「ネコちゃん寝冷えつてやーの？」

「いむ

アキホは寝冷えに興味津々のよひです。  
そりやそーだ。喋るんだもん。  
てかアキホちゃん、ちょっと驚いたわ。

「追手から逃れて街から街へ…氣づいた時こまか伸びの街へ帰つて  
いたので」やるおふん

急に語尾付け加えんな。それよりアナタ不倫してゐ事になつてますよー。

「前から氣になつてたんだが、追手つて…寝冷え何かしたの？」

「えー…やつぱりネコの世界にもボスとかいるんだ」  
「そのボスネコの娘がべっぴんでいるのが、」  
「まさか…」

「うむ。実は…この街一帯を仕切つているボスネコがいるんだ  
るおふん」

「つまんじゅつた」

「つまんじゅつた」  
「なにしてんだよエロネコー」

「ダメじゃんつまんじゅ

「アキホちやーん! 仮にも小学生が『つまむ』とか言わないのー」

「なるほどね。それでボスネコが怒つたワケか

「左様」

「ね」の世界も色々大変みたいですね。

「ねびねちゃんは」にかわいいよーするのね~。」

「ねびねちゃん……軽くHでHを想像しきつた てへ

「つむ。 わるそろ逃げるのにも飽きてきた所で、『じゃれ』。 『じい』は本格的にボスネコをやつてしまおうかと……」

勝手に頑張れ化け猫

「 加勢しまつせあんねちゃん 」

「アキホちゅーんつー!?」

「俺がまの手にかかるやあボスネコのー四つ巴、四つ巴がこのシーサーよ」

ああ…お田覚めですか闇下

「3人とも…かたじけない!」

ん?3人でボクも入ってる?つかー、うん、そりやそーだよねー。 だってボクが行かなきゃこの小説成り立たないもん。

いつもしてボクらはネコのケンカに巻き込まれました。

## 第7話・『ネコヒ油断ぬるべゆき壇場ひのくま』なにて無駄に発情

「……も監さん。トオルです。それで前回人語を話すネコ『寝冷え』のケンカに巻き込まれる事になつたわけですが…（シンセんヒアキホがやる気満々だから）

今ボクたちは寝冷えの案内で、ソリソリ一帯を仕切つてるボスネコの住みか団指してます。

「ねーねびちゃん」

妹のアキホが寝冷えを抱き上てる。あ、ちなみに『ねびちゃん』は寝冷えのことです。決して「ねびちゃん」と鶴原里の事ではありません。

「なんでいるか? アキホ殿」

「ボスネコのトコには元気な子がここにいるのー。」

ああ、それはボクも知りたいです。珍しくほともな質問ありがとつ。

「うわ。少なく見ても30匹はここにいるだらう」

「ウシヤシャー! 全て俺のまがミンチにしてやるー。」

確かに「アンタの手にかかるばリアルミンチにならかねませんね変態探偵

「シンセんヒのこーのー?」

アキホちゃん？この方は現代に蘇つたサイヤ人だよ？

「シン殿の御力、一目見ただけでヒシヒシと感じたでござるなよ」

何者だよこのネコ

「ウシャシャ」

「あははー」

「ニヤハハあふん」

とか笑つてゐ間にじりりやう敵の本拠地に着いたみたいですね。

「ニヤアアアー！」

「フーッー！」

なんていうネコらしい威嚇の声がチラホラと…正直小便チビツセツやでホンマ。

「さつそく来たみてえだなー！」

ああ…今日ほどアナタの存在に有り難みを感じた事はありませんよ  
閣下。さあー存分に暴れてやりなさいー！

「死ねやああ畜生どもがあああッー！」

シンさんのナイフが次々と野良猫に突き刺さつていいく（動物虐待は  
やめましょー）

「アタシもー」

え…アキホちゃん？なにその黒い物体。お兄ちゃんバカだからさー、

その黒いボンバーマンが使つよつた爆弾にしか見えないよ~

「ちえすとー！」

とか叫びながら投げた黒い物体……てかもう爆弾はネコの群れの中に見事着弾しました。ボク初めて見たよ…ネコが『ギャース』とか言つて空飛ぶと。

「では拙者も

おおー行くか寝冷え！『拙者』とか言つてるしなんとなく強そうだもんなー。

わざわざボスネコの娘に手を出す位だもん…きっとネコの世界では名の知れた…って寝冷えクソ弱つ！瞬殺されたよ！リアルミニンチになりそうな勢いでボコられてるよ！あ。そこにボンバーマンの爆弾着弾しちゃつた。さよなら寝冷え…君の事は忘れないよつーか喋るネコなんて来世になつても忘れねーよボケが。

ああ。もつシンさんの周りは動物愛護団体の方々が号泣しそうな光景が広がってるよ。じ苦労様でした閣下、そのままブタバコにお入り下さい。

そして向こうではまだ『ちえすとー』爆音『ギャース』が繰り返されてるよ。ハンドレスだよ。

「ウシヤシヤー弱すぎて話になんねーなクソネコまんま共ー」

ウチの閣下は『もひもひランジーハルイー』読みだしました。

「と…トオル殿…」

ん~ビンからか声が

「トドーリー...トオル殿」

下?

「うわー寝冷え生きてたのー?」

セヒコはベホマでも効かなそーな感じな重症の寝冷えがいた

「油断してはならぬぞ……まだ…『あやつ』がおるゆえ……」

「大丈夫だよ寝冷え。シンセんに勝てる生物なんて存在しないから」

セヒコのシンセを見てみると

「テメエえええ…」

「わーーーなんかネコにキレてるー。」

「あやつはー。」

寝冷えが言つてた『あやつ』ってあのネコみたいね。ま、ウチの変態にかかるば骨つき肉決定ですけど

「よくも俺さまの『もひもひランジョルイー』をおおおお」

「うやらねに『もひもひランジョルイー』を引き裂かれたようですが。とか泣くな変態

「一やアー。」

うん。ネコもなんか怒ってる感じですね

「ねえ寝冷え、あのネコなんて言ひてるの？」

「うむ。『あんたらよくもあちきの大好きな子分…いやフレンズ共を殺してくれたわねー』でござるおふん」

『一ヤアー』にそんなロングな意味が込められてたのかーーっ！ てか『フレンズ共』ってなんだ！『頭痛が痛い』みたいになつてんじやねーか！

「あやつがボスネコでござる」

なるほど。

「死ねクソバラッパラッパーがああー！」

シンちゃんがナイフを投げようとした瞬間

「ひでぶつー」

気付いた時にはシンちゃんが北斗の拳のザ・キャラみたこなやうな方で倒れてました。

向ひでは『ちえすとー

の日の午後でした。

』

爆音

『ギヤース』が続いている夏

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7606a/>

---

噂のたんてーさんっ！

2010年12月17日14時59分発行